
守護神

レックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護神

【Nコード】

N4745W

【作者名】

レックス

【あらすじ】

女神と死神に殺された主人公、創造神の計らいで異世界へと転生。主人公最強系物語。

プロローグ

さまざまな書類や漫画、小説などが乱雑に置かれた部屋で男が飯を食っていた。飯と言ってもインスタントラーメンであり、料理と言えるものではない。男は、インスタントラーメンに醤油や卵、ミョウガなどを入れ自分なりのアレンジを楽しんでいた。

「ふう、今日のアレンジはうまくいったな。ミョウガがいい働きをしている……ん？　なんだ、この丸いのは？」

男は、インスタントラーメンの中に丸い砂糖の塊みたいなものが入っているのに気づいたが、気にせずそれを口に入れた。

「まあ、別に毒じゃないだろう。ふむ、甘さの中にしょっぱさがあり、ミョウガのアクセントがうまく効いているな」

思いのほか美味なその物体に満足していると、突然身体が浮き上がるような感覚に男は襲われた。徐々に男は、浮遊感が強くなっていき、最終的には男の身体は完全に室内に浮いてしまっていた。

「おいおい、どういうことだ？」

男が戸惑っていると、突然室内に髑髏の仮面をかぶったローブ姿の女が現れ、その右手に持った大鎌で男を切り裂いた。男は、自分に何が起こったのか理解する間もなく、その魂を室内から消失させた。

食べ残しのインスタントラーメンと魂を失った男の身体だけが、部屋に残されていた。男は、数日ののちに家に訪問した姉によって、

変わり果てたその姿を発見される。

男は、大学四年生。就職活動も終わり、学業も順調で、あとはアルバイトをしながら卒業を待つだけであった。彼の死に、友人、家族たちは例外なく涙を流した。

男の魂は現在、魂以外何も存在しない空間に存在していた。そこには、大きささまざまな形をした数え切れないほどの魂が浮遊していた。浮遊している魂は、混じり合うこともなく、ぶつかることもなかった。

停滞し、変わらぬその空間に変化が訪れる。光に包まれた、人間の女性に似た何かが降臨したのだ。その存在は、男の魂を大事そうに抱えると、その空間から男の魂と共に消失した。

白き空と黒き大地に赤き社、それだけが存在する場所。そこに人間の女性に似た何かは降臨した。その手には、優しげに男の魂が抱えられている。とそこに、今度は人間の男性とも女性とも見える何かが降臨した。そして、その存在が何事か唱えると男の魂が赤き光に包まれ、生前の姿を取り戻した。

「なにが、どうなってるんだ。俺は……死んだのか？　ここは、どこだ？」

男は、うわごとのように呟いた。そのつぶやきにこたえるように、髑髏の仮面をかぶり大鎌を持った女が降臨した。そして、女が答える。

「ええ、あなたは死んだ。ここは、神が集う場所の一つ」

男は、突然現れた女に驚くと何かに気づいたように目を見開く。そして、じつと女を見つめた後思い出す。この女によって、大鎌を振るわれ死んだ瞬間を。と同時に、怒りがわきあがり気づけば女に突きみかかっていた。

「おい、お前！ どういうつもりだ！ 俺を殺しやがって！」

しかし、男は怒りの中でもどこか冷静な部分で女が死神であると考えていた。そして、恐らくはこの女に非がないであろうとも考えていた。だが、誰かにあたらねば心が壊れてしまいそうだった。女は、掴みかかられたままで、無機質に男に話しかけた。

「私は、死神の一人。あなたの魂を刈り取ったのは私、そしてあなたを間接的に殺したのはそこにいる女神」

死神は、人間の女性の様な存在を指さしてそういった。指をさされた女神は、顔を歪ませ男に向かって頭を下げた。

「はい、私がああなたの死の原因となった女神です」

続いて、その場に存在している最後の存在。人間の男性とも女性ともとれる存在が、一切表情も姿勢も変えずに口を開いた。

「我は、創造神。死神と女神の行った罪に対する謝罪と償いのためにここに来た」

男は、混乱した。死神、女神、創造神といきなり言われ現実味がなかったのだ。しかし本能的にある一つのことを理解した。理不尽な目に合っている。そして、男は神達に向かって言った。

「詳しく説明しろ」

創造神は、男に事のあらましを説明した。女神のミスで、男のインスタントラーメンに神の食物が紛れ込んでしまい、それを食した男の魂は一時的に幽体離脱したこと。幽体離脱した男の魂を浮遊霊と勘違いした死神が刈ってしまったこと。そして、創造神が過ちに気付いた時には男の死体は焼却されてしまっていたこと。そして、その謝罪をし、男に新たな生を記憶を残したまま授けるために今ここにいること。全てを聞き終わった男は、その場へたり込み泣いた。

「はは、なんだよそれ……くそつ。これから、働いて社会に出るって時に」

男はしばらくの間泣き続け、神達はそれをじっと見つめていた。そして男は、何もかもがどうでもよくなり、創造神へと言った。

「もう……いいや。どうにでもしろよ、転生でも何でもお前らの好きにすればいい。俺はお前らを許すことはないし、お前らに何かしてもらいたくもない。だが、このまま死ぬんじゃ馬鹿らしい。転生させるんだろ？ じゃあ、させる。話すことはもうないし、お前たちと話したくもない」

死神は俯き、女神は悲痛な顔をし、創造神は表情を変えなかったが身体を強くこわばらせていた。そして、創造神は男に話しかけた。

「行きたい世界や欲しいもの、能力はあるか？」

男は、はじめ答えるそぶりを見せなかったが、どこかうつろな眼をして、うわごとのように呟いた。

「……世界はどこでもいい。ペットが欲しい、俺が死ぬまでずっと一緒にてくれる奴が。あとは……生きがいが欲しいな、才能とかもほしいかな。能力ね、くれるなら、なんでもいいや」

創造神は、真剣に男の声を聞いていた。一言も聞き洩らさぬように。死神や女神も一切聞き洩らさぬように聞いていた。創造神は、男がしゃべり終えたと判断して男に話しかけた。

「そうか、お前には使い魔とある程度の才能に加え私たちから1つづつ能力を与えよう」

男は、生気のない目で頷いた。

「創造神である我からは、創造錬金の力を」

「女神である私からは、条件結界の能力を」

「死神である私からは、死神の装備を与える」

男は、3人の手から放たれた赤、白、黒の何かが自分の身体に入るのを興味深そうに見ていた。そして、全ての光が身体に入った時、空間に門が現れた。男は、何も言うことなく、門へと向かいくぐった。

最後に聞こえたのは、神達の謝罪の言葉と男への激励の言葉だった。

「……すまなかつた、新たな生を往生できることを願う」「」

第一章 第一話

門をくぐった先は、森だった。男が空を見上げるとわずかに木々の間から光が漏れ、日中であることが分かる。彼の周囲には樹や草、土といったそこが森であることを示すもの以外何もなかった。彼は、深呼吸をすると、光のともっていないかった目に光を宿して森の探索を開始した。

「ふう、いつまでも沈んではいけないな」

男は周囲を注意深く見まわし、様々な音に警戒しながら森を進んでいった。彼の足が慣れない山道と緊張の連続によって悲鳴を上げ出したところ、彼は整備された道のようなものを見つけた。そこで彼は、1も2もなく道へと飛び出した。飛び出してしまった。

「ワォーン!!!」

男の飛び出した先には、彼と同じほどの大きさを持った生物がいた。その生物は男に狼を彷彿とさせた。その生物は彼を発見するとすぐに雄叫びをあげ、襲いかかってきた。彼はとっさにしゃがみこんでその襲撃を回避したが、生物はすぐに振り返り再び襲いかかってきた。彼は恐怖のあまり、動けず、しかし声を上げることはできなかった。

「誰か助けてくれ!!!」

男は、大声を上げることで恐怖を忘れられたのか、両腕をクロスさせることができた。生物は男の大声にも一切怯まず襲いかかってきている。男に生物が到達すると思われたその時、男の身体が赤く

光った。そして、男の身体の中から赤い何か飛び出して生物へと衝突した。生物は、その衝撃で吹き飛ばされ樹にたたきつけられた。生物は衝撃で気絶したのか、死んだのか動かなくなった。

「な、何が起こったんだ……」

男の前には、全身を燃え上がらせた鳥の様なものが存在していた。そして、その鳥の様な存在はじつと男の眼を見つめていた。男は、その鳥の様なものに見つめられているうちにあることを思い出した。

「お前がもしかして、俺のペットなのか？」

その鳥の様なものは男の言葉を理解したかのように頷いた。男は、鳥の様なものが自分の味方なのだとしつて落ち着き、鳥の様なものに問いかけた。

「そうか、名前はあるのか？」

鳥の様なものは首を横に振った。男は鳥の様なものに名がないと判断し、名を考えた。男はいくつかの名を呟きながら、そして最終的に鳥の様な物の名を決めた。

「鳥だから、フライ……いや、どうみてもフェニックス……ならば、不死鳥……いや、そうだな、朱雀にしよう！おい、お前の名は今から朱雀だ！よろしくな、朱雀！」

朱雀は、名を与えてもらったことが嬉しいのか羽を大きく広げ嘶いた。その声は美しく清らかで神秘的ですらあった。その後、しばらくすると朱雀を覆っていた炎が次第に弱まっていき、ついには消えた。朱雀はただの美しい赤い鳥となった。

「ほう、綺麗だな。さっきの姿もきれいだったが、ふむ、今の姿もいい」

男が、朱雀の姿に感心していると朱雀が突然大きな声で嘶いた。

男はその声に驚くが、朱雀の眼が男ではなく男の後ろを見ていることに気づき、振り返った。そこには、先ほどの生物と同じ生物が数匹やだれと唸り声を携えて存在していた。

「おいおい、やばくないか？　なあ、朱雀」

男は、朱雀を見らずに狼のようなものを見ながら呟いた。その言葉に反応するように、朱雀はその身に再び炎を纏い、狼の様なものたちへと襲いかかった。朱雀は瞬く間に数匹の狼の様なものたちを燃やし、吹き飛ばし討伐した。

「はは、すげえや朱雀」

男は、感嘆したようにそう言った。すると奴らを討伐し終えた朱雀が男の方を見て、大きく嘶いた。男は自分への何らかの意思表示だと考えたが、それは警告だった。男の後ろには1番初めに朱雀が倒したはずの狼の様なものが迫っていた。

第二話（前書き）

適当にかいてます

第二話

狼の様なものが男に到達する寸前、狼のようなものは斬撃によって両断された。両断されたそれは、二つのもの言わぬ物体となり地面に転がった。斬撃を放ったのは、杖を持った白髪の老婆だった。男は、いきなりの事態に混乱し、ただただ両断された死体と老婆を交互に見ていた。朱雀は、老婆と男の間にすぐさま割って入り、じつと老婆を見つめた。その姿は、主を守る騎士のようであった。

「おやおや、赤い鳥は私を警戒しているようだねえ。まあ、いいさ。ところで、坊やこんなところで何をしているんだい？　ここは、武器一つ持たない一般人が来るような場所じゃないんだがねえ」

男は、老婆の言葉に正気を取り戻し老婆をじつと見つめた。そして、何かを言おうとしたがやめ、しばらくうねった後老婆に対して口を開いた。

「お、俺は……その……迷子って奴なんだ。気づいたらペットの朱雀、ああ、この赤い鳥なんだけどこいつとここにいて、どれくらいかわからないが数時間ぐらいここをさまよってた」

男の言葉を聞き、老婆は眼を光らせた。そして何事かを感じ取ったのか、片眉を跳ね上げた。杖をつきながら男に近づいた老婆は、威嚇する朱雀をなだめ、男に優しく話しかけた。

「ふむ、まあここは危険じゃし、とりあえずは家にでもきたらええ。見たところ、お主弱そうじゃし、危険もなさそうじゃからな。ああ、もちろん朱雀と言ったかな、ペットも連れてくるがいい。そのグレイウルフの血に引かれて魔物が集まってきたもかなわんからな。さ、

そうときまったらすぐに移動じゃ」

「え、あ、はい！」

こうして男は老婆の後をついていった。出発する際、老婆は男の背後を見つめた。そこにはグレイウルフ数十匹の群れがいたが、老婆が一睨みするとみな逃げて行った。グレイウルフの存在に気づいていたのは、老婆だけだった。

歩くこと数十分、二人と一匹は老婆の家についた。森の中でもひとときわ目立つ大きな木、その隣に老婆は住んでいた。老婆の家は、小さな木製の小屋であり、大きさ自体はあまり広くなかったが、中に入るといくつも置かれた槍や剣、刀に斧、弓にボウガンなどが存在感を放っていた。一方で、家の中央に存在する炬燵やあつたかそうなベッドが生活感を醸し出していた。

「おれ、何を棒としておる坊主、そこに座らぬか。おお、鳥はこの布で足をふきなさい」

老婆の家につき、ゆっくりと炬燵に入った男は足をふいた朱雀の肩に乗せほっと一息ついた。その様子を見た老婆は、ニコリと笑うと戸棚から食器と菓子を出して男と朱雀に与えた。男と朱雀はは、出されるとすぐに口に入れ水までも要求した。老婆は、苦笑しながらもそれをすぐに用意した。

「つつばあ、うまい！　ありがとな、ばあさん」

「コーコー」

水を飲んだ男と朱雀は二人して老婆にお礼を言った。お礼を聞い

た老婆は、人のよさそうな笑みを浮かべるとうなずいた。そして、ゆっくりと腰を下ろし、大きく深呼吸すると男に話し始めた。

「よいよい。さて、人心地ついたみたいなのでぼちぼちお話でもしようかね。坊主、お前さん名前は何というんだい？」

男はいまさらながら名乗ってないことに気づき、老婆に頭を座げつつ答えた。

「あつ、すみません！ えっと、俺の名前はハナヤマ・レイキって言います。で、こいつはペットの朱雀です。ほら、あいさつしな」

「コーコー」

「ほうほう、ハナヤマ・レイキとな。その響きからするとお前さんも大和の出かい？」

「えっ、あゝまゝ、ある意味大和っていうか。その、出身地はちょっと事情があつて言えないっていうか

……もう戻れなくて」

「そうかい、そうかい。まあ、無理に言わんでええ。年なんか聞いてもいいかい？」

「あ、気を遣わせてしまつてすみません。年は21歳です。まあ、学生でした」

「でした？ まあ、ええか。じゃあ、何であんなとこに一人で居った？」

「話せば長いんですが、簡単に言えば拉致られて、放り出されたのがここらへんだったってことすね」

「なんじゃ、ずいぶんと物騒な話を簡単にするのう」

「あゝ、まゝ、これもいろいろ事情があつて、向こうさんに悪気はなかったつていうか、むしろ善意つていうか、すいません、これ以上はちよつと」

「ふむ、なぞの多い坊主じゃて。して、行くあてなどあるんか？」

「え、いやないですね。知人一人いません、朱雀を除けば天涯孤独ですね」

「そうか、ならここに住んでよいぞ」

「え、ほんとですか!？」

「ああ、正し条件付きじゃ」

「え、あ、そうですよね。それで、条件つて……」

「なあに、お前さんには家事を手伝ってもらつのとある技術を修めしてほしいのじゃ」

「ある技術……ですか？」

「どつかの？」

「えつと、できるかわかりませんが、よろしく願いします!」

「ふむ、では今日からよろしくの」

「はい…！よろしくお願いします」

「…」

第3話（前書き）

お久しぶりです。異世界者の更新予定はありません。何を書けばいいのか・・・

第3話

青年が老婆のもとで暮らすようになってから3年の月日がたった。青年は毎日老婆の身の回りの世話や家事、雑用などを行っており、その合間に老婆からある技術を仕込まれている。ある技術とは、老婆が修めている武術である。剣術と徒手空拳を基本とし魔力によって肉体を強化し戦うものであり、魔力を剣撃や拳撃として飛ばす術も存在する。青年レイキは、雑用を一通り終わらせると今日も老婆の訓練を受ける為彼女の元へと向かった。

「師匠牧割り終えました」

青年が老婆の元へ向かうと、そこには縁側でお茶を飲みながら朱雀とじゃれ合っている彼女の姿があった。青年は自分の相棒であるはずの朱雀が自分を手伝いもせずのうとうと寛いでいるのを見て怒り、怨念のこもった視線を投げかけるが、朱雀は一向に青年を振り返ることはなかった。朱雀はその時顔を青くして震えていたとは、老婆の後日談である。老婆はそんな青年の様子を面白そうに見つめながら茶を飲み干すと、おもむろに立ちあがった。青年は老婆の様子を見てすぐに所定の位置につき構えをとる。

「そうか、じゃあ始めるとしようかの」

老婆は、立てかけてある杖を手にとるとそれを弄びながら青年の正面へと向かった。そして、所定の位置につくと杖を弄った。すると杖は剣へとその姿を変える。仕込み刀である。老婆はチラリと青年を見ると言った。

「行くぞ？」

青年は、右足を強く踏み込み老婆との距離を一気に詰める。老婆はあわてることもなく相對する。青年は老婆の間合い一步手前にて刀を鞘から抜き放つ。目にもとまらぬ超速の抜刀術。しかしそれは老婆のはいた草履により止められる。いや、踏みとめられる。老婆は神速の突きを青年に放つが青年は刀を離し、老婆の刀に手を添えてその軌道を反らす。そこから刀を使う老婆と無手の青年との戦いが始まった。

「くっ、流石にきついつ！」

老婆の無数の突きを捌き、避け、反らす。しかし、一撃でも当たればそこで終了。青年は極限の集中力を発揮しながらも、徐々に追い詰められていった。一方の老婆は、その外見からは想像することのできないタフさを発揮しかれこれ20分もの間突きを放ち続けている。このまま永遠にこの勝負が続くかに思われたが、老婆の一言により戦況は一変する。

「そろそろ、魔力を纏おうかの？」

瞬間老婆の刀と身体から緑色の光が放たれ、一方の青年からも緑色の光が放たれる。老婆と青年の動きがスピードを増し、二人の戦いは一層苛烈さを増していった。ここにきて青年は老婆の攻撃に立てられなくなり、一步二歩と後退を始める。老婆はそれを好機と見て、今までで一番早い突きを放つ。その瞬間青年の動きが一気に加速する。

「この時を待っていた!!!」

青年は伸び切った老婆のをつかむとそのまま老婆の懐に入るよう

に回転する。そして、肘を老婆の胸にあてようとして老婆の掌底を腹にくらった。後方10メートル程吹き飛び木々を3本へし折って、4本目で止まる。そこへ老婆の投げた杖剣が襲い来る。青年はその剣を首を捻って避けると回転しながら立ち上がり、とびかかってかかと落としを放ってきた老婆を弾き飛ばす。くるくると着地した老婆は、一寸の間も置かず飛びかかってくる。俺は回転しながら老婆と打ち合うが数号打ち合った結果上に弾き飛ばされた。青年は宙降りをする木を足場として老婆に突っ込んだ。老婆は青年の首を狙い手刀を放つが、青年は回転しながら肘でそれを防ぐ。地面に両手をつくると前方宙返りを行い態勢を整えて着地した。

「ふう、やはりまだ勝てませんね」

息を整えた青年は杖をつきながら歩く老婆に向かってそういった。しかし、老婆は不敵に笑うと青年の言葉を否定するように言った。

「何を言っておるか、わしと引き分けるだけでもすごいことなんじやぞ。まったく、三年でこのわしにと互角にやりあえるようになるとは……生意気な童子じゃて。まあ、剣術はまだまだじゃがな」

「そ、それを言われると何にも言えませんが」

青年は照れたように頭をかいた。老婆は青年を剣術面で否定こそしたものの十分な実力をつけているとも感じていた。そして、ほぼ頭打ちであるとも。老婆から見て青年の徒手空拳は自分以上であり、剣術は一流に毛が生えた程度であった。また、彼に足りないのは経験だとも思っていた。老婆は決意すると言った。

「レイキ、剣術の奥義と徒手空拳の奥義を明日見せる。それを見たら、主は出て行け」

青年は、言葉を聞くと目を見開いた。しかし、しばらくするとそつと目を伏せ言った。

「……はい、了解しました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4745w/>

守護神

2011年11月29日02時58分発行